

ミステリ読書案内

2019. 12. 3 発行元

第3号 伊藤 剛

河野裕「階段島シリーズ」

最近の「ライト文芸ミステリ」系統からもお勧めの本を紹介したい。河野裕の『階段島シリーズ』が、平成の時代の終わりに合わせたかのように完結した。『いなくなれ、群青』のシリーズと言った方が、世の中では通りはよいかも。青春ミステリのひとつの金字塔。

河野裕《階段島シリーズ》

1. いなくなれ、群青
 2. その白さえ嘘だとしても
 3. 汚れた赤を恋と呼ぶんだ
 4. 凶器は壊れた黒の叫び
 5. 夜空の呪いに色はない
 6. きみの世界に、青が鳴る
- いずれも新潮文庫NEXXのシリーズから、文庫書き下ろしの形で出版された。ベストセラー本で、100万部とかの大台に乗る勢いである。

『いなくなれ、群青』からのスタート

このシリーズがスタートしたのは平成26年。完成まで5年近くかかったことになる。5年間で6冊はけて速い方ではない。

私が読み始めたのは、2巻目が出て、その年の『このミステリーがすごい!』に取り上げられて紹介されたからだ。その時点から考えても、「ずいぶん待たされたな」という印象が強い。

シリーズの物語としての全体像が見えてくるのが3巻目あたりからで、「これは一体どうなるんだろう」と思わせられてからの時間が長かった。

壮大なパラレルワールドの構想

1・2巻目のあたりでは、舞台が閉じられた狭い世界で、「？」が常につきまとう展開。先が見えない不安感を持ちながら読み進める形。

やがて、霧が晴れるようにパラレル構造の世界が明確になり、「なんと壮大な構想なのだろう」と驚かされる。いろんなパラレルワールドの

描き方があるが、これは、物語の中で完全に2つの世界に分かれているのだ。登場人物が丁寧に描かれていて(時々視点が変わるが)、“魔女”の立ち位置もよく考えられている。読者の共感が得られるように工夫されていることに気付く。

青春ミステリとしての特徴である「自分の歩むべき道」を熟考する過程も、その結果導き出された物語の結末も、十分に納得できる流れとして作り出されている。

映画化の話で、一人ひとりの人物が平等にじっくりと作られているので、映像化しやすいと思う。最終巻になった『きみの世界に、青が鳴る』で、登場人物が安定した落ち着き先を決め、読んでいる私もほっとした。「ああ、良かった!」

私との相性は今ひとつ…

と、書きながらも思うのだが、河野裕という作家、私との感覚的な相性は今ひとつ良くない。私の立っている土台は従来からの「ミステリ」であって、河野の描きたいものは、私の考えている「ミステリ」の枠か

ら少しはみ出ているような気がする。河野の別シリーズ『つれづれ北野坂探偵舎』を読んでも、私には面白さが十分に掴めないという印象がある。

今の「ライト文芸ミステリ」の「キャラクター」重視の描き方、私はあまり賛成できない。登場する人の人物像のあれこれを描き、その人が悪戦苦闘する姿を描くことに重点が置かれすぎていて、事件を引き起こしている背景やそれを取り巻く多くの人々、事件の謎を解くことの筋道や論理性がびったり伝わってこないのだ。「人物」を取り除いてしまうと、後には何も残らないのはちょっと困る。

知念実希人とか中山七里とか、今一番の実力者と思える作家の作品と比べると、河野の作品は別次元・別世界のような気がする。今後、どんなミステリの方向に進むか注目していきたい。

海外ミステリ この1冊・連載2

ガストン・ルルー『黄色い部屋の謎』

『海外この1冊』に、この本の紹介がないのはおかしい!と叱られそうな本の第一候補。世界ミステリのベストテンに必ず登場する名作中の名作。私が学生の時読んだ本は創元推理文庫だった。

1907年の作。これ以降のミステリに与えた影響は非常に大きい。その歴史的価値を踏まえて読んでみると、密室殺人の謎、意外な犯人像……など、いろいろな要素を兼ね備えた傑作だと言える。都筑道夫の探偵小説論『黄色い部屋はいかに改装されたか』の題名に引用されているのを見てもわかる通り、ポオの諸作やシャーロック・ホームズ譚と並ぶ、ミステリの出発点を示していると言えよう。

ガストン・ルルーはフランスの人。フランスミステリでは珍しい謎解き本格物。ルルーが書いた作品の中で、この『黄色い部屋』だけが飛び抜けた出来で、他に『黒衣婦人の香り』などの作品がいくつかあるようだが、あまり見るべきものはないと言われている。そういう作家も中にはいるということだ。